

## 孫 娘

長谷川 景 崇

(千葉市消防局長)

私達の年代になると大抵の人に孫がいる。ご多聞にもれず、私にも女二人、男一人の三人の孫がいる。娘の子供で、女といっても7歳と2歳の姉妹である。

この姉妹の動きを見ていると大変面白い。姉の妹に対する心くばりが、非常に細やかでやさしい反面厳しいところがある。

妹の方は甘えん坊で、言葉もはっきり発音できず、母親や姉がいないと一時でも私や妻のそばにはいられない。

この二人のやりとりを見ていると、妹のほしがるものはよほどのことがない限り姉は気前よく与えるが、粗末にしたり放っておくと、「だめよ。もうあげないから。きちんとしておきな。」と、お姉さんぶって注意する。妹は、不思議に「うん。」といい、素直に片付けたり仕舞ったりする。母親や私達が同じことを言っても、決してそんな行動はとらない。

母親は、そんな時「だめよ。ちゃんとしておきなさい。やらないとペンペンするわよ。」と、妹の尻を叩くから泣きだしてしまう。

姉はそばにいて「さきちゃんが悪いのよ。ママにメンチャイ（ゴメンナサイのこと。）しなさい。」と詫びさせる。母親は、「今度はきちんとしておくのよ。いい子だから。」となだめる。

また、この二人には、私達には分からない何かがあるらしく、食卓を囲んでいる際にも、妹が「アレ、モグモグ……。」と言いながら指をさす皿の上のものを、母親や父親は「これ、あれ、どれなの？」と聞いて、やっとほしいものを取り分けて与えるが、姉の方は「はい、これね。」と一発で分かってしまう。

この幼い姉妹の日常の行動を見ているうちに、私は消防士を拝命した当時のことを思い出した。同じ先輩でも、1～2年先に拝命した先輩は、物事を教えるにもこの母親のように威圧的に押し込むような方法をとった。まだ若かった私は反発することが多かったが、仕事をする上で、覚えなければならぬことが多かったので、やむなくそれに従っていた。

5～6年先輩のWさんという、懇切丁寧にかゆいところに手がとどくように教えてくれる人がいた。一度教えられたことができないと、「理解出来なかったらなぜ質問しない。知らなかったでは現場で命をも失いかねないぞ。」と厳しく注意されたが、この小言を抵抗なく受け入れ、知識の吸収に懸命に努力してきた。

私も勤務年数を重ねるに従って後輩を指導する立場に立ったとき、このWさんの方法を取り入れて後輩に接して来たつもりだが、なかなか思うとおりに行かなかった。やはりその人の持つ人徳や識見というか、なにか私と違うものがあることに気が付き、いろいろな面で大勢の人にご教示を得て勉強をさせていただいたが、その成果を生かし切れたかどうかは今だに疑問である。しかし、後輩の私に対する態度に変化があったことも否めない事実である。

私は、孫娘達が今見せてくれている関係を、いかに周囲の環境が変わろうとも持ち続けてほしいと思うし、私自身も、職員との間に相互の意思が通い合っているこのような関係を持続し、政令指定都市消防の基盤固めの一助になりたいと思っている。